

聖書：ヤコブ 5：12～15

説教題：信仰による祈り

日時：2017年12月10日（朝拝）

前回の5章7節からヤコブは最後のアピールに入っています。12節でまず述べられているのは「誓い」についてです。彼はここで「私の兄弟たちよ。何よりもまず、誓わないようにしなさい」と言います。この手紙の読者たちは迫害によって散らされて生活が困難な状況にありました。そんな中、彼らは自分たちを苦しい状況から救い出すために、誓いを多用していたのかもしれませんが。私の言っていることは本当だ！と相手に受け止めてもらうために。あるいはこの手紙を見ると、彼らは互いにねたみ、舌を制御せずに言い争っていたことが分かります。そんなお互いへの中傷の言葉や根も葉もないうわさが飛び交う会話の中、これだけは真実であると強調するために誓いが多用されていたのかもしれませんが。そんな彼らにヤコブは「誓わないようにせよ！」と言います。思い起こすのはイエス様の山上の説教のお言葉です。イエス様も「決して誓ってはいけません」と言われました。また「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」とだけ言いなさいと言われました。まさに今日のヤコブの言葉と同じです。と言うよりヤコブがイエス様の言葉をもとにしてこの言葉を語ったのでしょう。イエス様の山上の説教の言葉もそうですが、これはすべての誓いを禁止するものではありません。歴史の中ではこれを文字通り受け留めて一切の誓いを拒否するクリスチャンたちもいました。しかし聖書を見ると、神ご自身が誓っている箇所もあります。詩篇 110 篇 4 節：「主は誓い、そしてみこころを変えない。」ヘブル書 6 章 13 節：「神は、アブラハムに約束されるとき、ご自分よりすぐれたものをさして誓うことがありえないため、ご自分をさして誓った。」あるいはパウロも手紙の中で、読者への愛や自らの潔白性を述べる際、「神がそのことの証人です」と神の名を引いて誓うことがありました。

これに対してヤコブがここで扱っているのは、日常生活における軽々しい誓いです。これをする結果、人々は自分の言葉を二つのレベルに分けることになります。すなわち誓いとして語る言葉はウソ偽りを一切含まないが、そうでない場合は必ずしも真実ばかりを語っているとは限らないという区別です。こういう区別を持ち始めると、それはさらに複雑な区別へと進みます。マタイの福音書 23 章 16 節からの部分を見ると、当時の人々は誓いをする際、誓いの中にさらに区別を設けていたようです。すなわち神殿をさして誓ったのなら何でもないが、神殿の黄金をさして誓ったなら、それは果たさなければ

ばならないとか、祭壇を指して誓ったのなら何でもないが、祭壇上の供え物をさして誓ったら、それは果たさなければならぬとか……。こんな区別を設けたらいくらでもごまかすことができます。指す指の角度を微妙な方向に向けることによって、いくらでも言い訳をしたり、相手をだますことが可能になります。しかしヤコブはイエス様の言葉に従って、「はい」を「はい」、「いいえ」を「いいえ」としなさいと言います。すなわちクリスチャンは言葉に何かを足してごまかすのではなく、明瞭に、簡明に語るべきである。真実な言葉のみを話すべきであると。そうするなら誓いなどというものは普段の生活では一切不要になるでしょう。

ヤコブは「それは、あなたがたが、さばきに会わないためです」と言います。前回、主が来られるのは近いと言われました。いくらこの世をうまく切り抜けても間もなく主のさばきの日が来ます。主はその日には、私たちの外側の振る舞いだけでなく、私たちが口から出した言葉も問われると言われました。マタイの福音書 12 章 36～37 節：「人はその口にするあらゆるむだなことばについて、さばきの日には言い開きをしなければなりません。あなたが正しいとされるのは、あなたのことばによるのであり、罪に定められるのも、あなたのことばによるのです。」 ですから私たちは、私をさばかれる主の御前で正しい言葉のみを話すようにしなければなりません。人間的な技巧に走らず、「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」と語って、誠実に正直に、そして率直に真実を語る歩みへ進みたいと思います。

続く 13 節以降は祈りへの励ましです。ヤコブはまず「あなたがたのうちに苦しんでいる人がいますか」と語ります。もし皆さんがこう問われたらどうでしょうか。「はい、苦しんでいるのは私です！」と顔を上げるでしょうか。この手紙の読者たちの多くは苦しみのうちにあることをヤコブは知っていますが、あえてこのように問います。そして「何を語ってくれるのだろうか」と顔を上げる人々に勧めるのが「祈り」です。たびたび祈りに関する勧めはこの手紙の中に出て来ましたが、ヤコブは最後にもう一度このことをアピールするのです。

また彼は「喜んでいる人がいますか」とも問います。こちらに「はい、私です！」と顔を上げる人はいるでしょうか。こちらの方は少ないでしょうか。しかしそれは私たちの感謝の足りない性質と関係するかもしれません。私たちは実際は多くの恵みと祝福を日々主から受けて生活しているのではないのでしょうか。その人は賛美しなさいと言われ

ています。ヤコブはこの二つの言葉を持って、人生のすべての経験を表していると思われます。私たちは苦しんでいる時、ついつぶやき、気落ちし、絶望して神に祈らなくなりやすい。一方、喜びに満たされていると、あの 10 人癒された人の中のサマリヤ人を除く 9 人のように、神のところに感謝するために帰って来ず、神を忘れる。そんな私たちにヤコブは、どんな時も神のもとに行くように！と勧めているのです。神はあらゆる時にあなたが神のもとに来るようにと求めておられる。その神との関係において真の祝福に生きるようにとヤコブは勧めているのです。

さらに次の 14 節では「あなたがたのうちに病気の人がありますか」と問います。この人々にヤコブは何を語るのでしょうか。ここでも彼が勧めるのは祈りです。しかしここでは「自分で祈れ」ではなく、「教会の長老たちを招いて」と言われています。ここから分かるいくつかのことは、まずこの人の病状は相当に良くないということです。自分で教会に行くことができないほどなので長老たちに来てもらうということなのでしょう。二つ目に呼ばれるのは「長老たち」とあります。長老とは信仰的に成熟した人々で、会衆から選ばれて群れ全体の霊的成長のために心と体を用いている人々です。また三つ目に長老「たち」と複数形で語られています。このことは一人が出かけて行くというよりも、複数の長老「たち」が出かけて行ってこの働きをするということを示唆するものかもしれません。

しかし何と言ってもここで私たちの注目を引くのは「オリーブ油を塗って」という部分ではないでしょうか。これはどういうことなのでしょう。二つの理解の仕方が考えられます。一つは医療的な意味です。良きサマリヤ人のたとえで、サマリヤ人は強盗に襲われた人にオリーブ油とぶどう酒を注いで包帯をしたと記されています。そのようにオリーブ油には実際に傷を癒す効果があった。これは今日に当てはめれば有用と思われる薬などを無視しないことだと言われます。「祈りによって直す」とだけ言わないで、活用可能な最良の医療の助けを用いながら祈るべきことをこれは示していると。確かにそれはその通りだと思いますが、なぜここでそれを長老たちがするようにと言われているかについては疑問が残ります。オリーブ油に、また今日の薬に人をいやす実際効果があるなら、長老たちがしなくても、もっと早い時点で身内の人がしてあげた方が良いのではないのでしょうか。しかし長老たちが塗るようにと言われていることを考えると、これは宗教的意味合いを持つ事柄として言われているように思えます。

そのもう一つの理解の仕方は宗教的また象徴的な意味であるとするものです。油は旧約時代から神の祝福のしるし、聖霊の象徴として用いられて来ました。その油を塗りながら、ここに象徴されている神の恵みがあなたに豊かに注がれるように祈るということです。この油が実際に体に塗られることを通して、より良く神の恵みに心を向け、それを期待し、待ち望む信仰に生きるということです。

果たして今日もこれを字義通りにすべきかどうかは難しい問題です。なぜなら使徒たちは祈る時にいつも油を塗っていたとは聖書に書かれていないからです。そうしなくても祈りが聞かれている例はたくさんあります。ですからこの一節から祈りのルールを定めることには慎重であるべきだと思います。私たちがここから学び取るべきは、祈りはこのような神の祝福と結びつけて考えられるべきであるということではないでしょうか。油に象徴される恵みをもって、神が豊かに今ここに働いてくださると信じて祈り求める。そのために実際に油を用いても良いかもしれませんが、油に魔術的な力があるかのように誤解されないようにしなくてはなりません。主の御名による祈りにこそ力があるのです。

そのことが15節でもこう述べられています。「信仰による祈りは、病む人を回復させます。主はその人を立たせてくださいます。」すでに祈りについては1章5～8節で大切な原則が語られました。そこでは「少しも疑わずに、信じて願いなさい」と言われました。誰にでも惜しげなく、咎めることなくお与えになる神をまっすぐ見上げて、二心ではなく、真心から信じて祈りなさいと。これはもちろんすべての信者に勧められていることですが、とりわけ群れの指導者である長老たちは、この「信仰による祈り」をささげることのできる人であることが前提にされています。その長老たちがささげる祈りを通して神は働いてくださるということが言われているのです。

しかしこれはどういうことでしょうか。信仰による祈りがささげられるなら病む人は必ず回復されるということでしょうか。それによって、そこでささげられた祈りは信仰による祈りだったことが証明されるということなののでしょうか。もしある長老を招いて祈ってもらっても、そこで何も起こらなければ、その長老は信仰による祈りができない人ということになるのでしょうか。あの長老さんではダメだから、今度はこっちの長老さんと呼んで祈って頂きましょう！ということになり、そうして取っ替え引っ替えして、長老さんの信仰を判別できるということなののでしょうか。もちろんそういうことではな

いでしょう。祈りとは私たちの願いを神に聞かせる手段ではありません。どんなに私たちが熱心に、また執拗に祈っても、神はご自身から見て良いと思うものしか私たちには与えません。私たちは病から回復し、あるいは人生の様々な問題が解決してなくなることが私にとって最高のことだと思いますが、神はそうでないとされることがあります。パウロも肉体のとげを取り去ってくださいと何度も祈りましたが取り去られませんでした。かえって病や試練は、その人の霊的生活を一層豊かにするものとして、あえて取り去らず、そこに置いておくということも神はされるのです。

ですから祈って相手を直せることが「信仰的な人の祈り」で、そうでない人は信仰が足りない人ということではありません。信仰とはヤコブがこれまで述べて来ましたように、どんな状況に置かれても、主こそ主権者であることを仰ぎ、主のご自身の民への愛と慈しみを確信して、その全能の御手により頼む信仰です。ですから招かれた長老たちは、「ここでこの人がいくらかでも変わるようにしなければならない！そのことによって自分が信仰ある長老であることを証明しなければならない！」と考えて、気負った祈りをすべきなのではなく、恵みを受けて、群れの中で信仰における成熟を導かれて来た者として、他の会員よりも神を深く知ってきた者として、その神に対する常日頃からの自分の真実な信仰をかけて祈るのです。そういう長老たちのとりなしの祈りを通して神は働いて下さる！御心に従ってその人を立たせ、回復させて下さる！ということが語られているのです。

15節の最後には「また、もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます」ともあります。これはある人の病気の背後には必ずその人の何らかの罪が関係しているという意味ではありません。「もし～犯していたなら」とあるように、これはあくまで仮定の話です。そういう場合もあるでしょうし、そうでない場合もあるということです。ただヤコブのポイントは、もし何らかの罪が原因で病気にかかっていた場合でも、その人はこの祈りを通して罪も赦して頂けるということです。病に陥りながら同時にその原因となった罪を自覚している人にとって、体が良くなることも切実な願いですが罪の問題も切実な課題です。しかし長老たちの祈りを通して、自分では処理できなかった罪、清算できなかった罪も赦して頂ける。心身共にきよめて下さる主のみわざにあずかり、新しい恵みに生かして頂ける。祈りはこのような霊肉両面に渡る祝福をもたらす手段であることをヤコブは思い起こさせています。

この続きは次回見ることとします。果たして私たちの毎日の歩みはどうでしょうか。様々な問題が起こる中で、人間的な知恵で乗り越えることに一生懸命になってはいないでしょうか。誓いを多用することはないにしても、神の前に良しとはされない言葉を口から出して、人間的に争い、相手に打ち勝つことに一生懸命になっていることはないでしょうか。しかしヤコブはさばきの主が来られることを見据えて、正直な言葉、明快で透き通った言葉のみを語るようにと勧めました。そして何よりも神に祈る生活を勧めました。私たちは今日のヤコブの言葉を聞いて、祈りの力にもっとより頼むようにと励まされるべきではないでしょうか。神は私たちの祈りに聞いておられ、最善の御心に従って良いものを私たちに与えてくださいます。信仰によってささげられる祈りは病む人を回復させ、主はその人を立たせてくださり、また霊的な必要にも答えてくださいます。このことを覚えて自らも「信仰による祈り」をささげる者となるように、また特に長老として召された者たちは、この祈りをささげて兄弟姉妹の益に仕える奉仕ができるように、日々神を見上げ、神と交わり、神に近づく祈りの精進を重ねて行きたいと思います。そして自分のためだけでなく、他の兄弟姉妹の祝福のために主の最善を祈り求め、ともに主の豊かな恵みに生かされる歩みへ進みたいと思います。